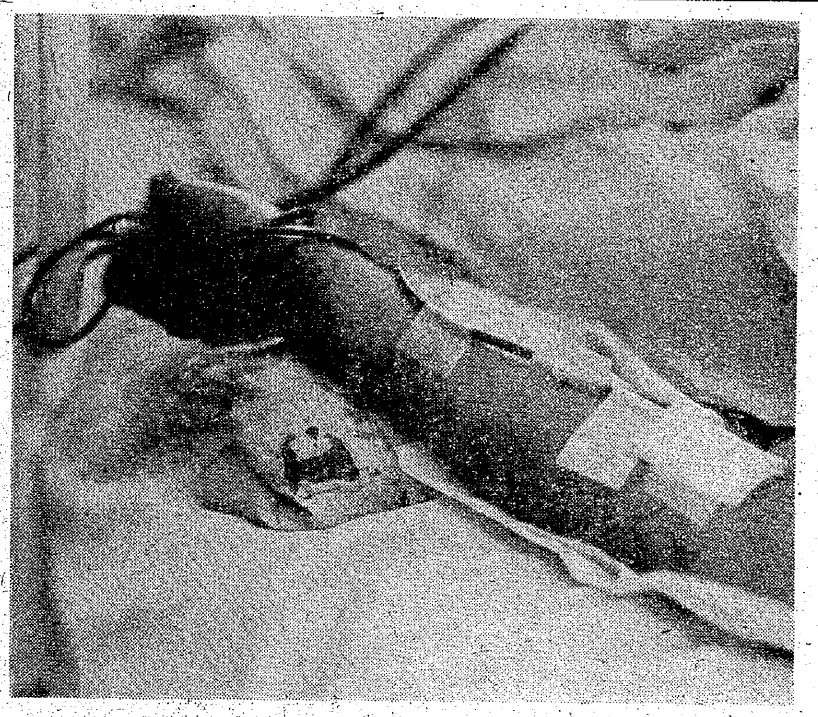
原告団

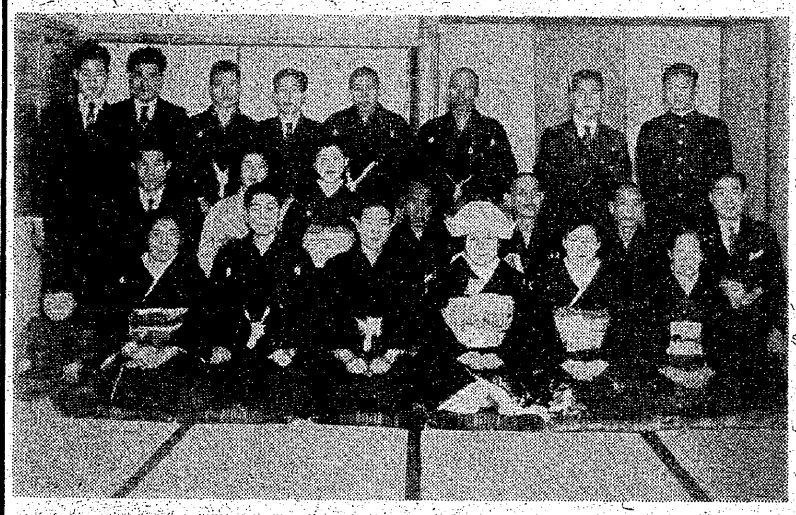
遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第九十七号

透析中のスミ子さん。どうか一日でも長く生きてくださいと祈らずにはいられない。



写真は、透析を受けている釘崎スミ子さんの左手。手首にビニールチューブにつながる注射針が2本（動脈と静脈）突き刺さつている。血液がチューブのなかを、コイル（透析液槽）へとはげしく流れている。生きるためにはただ一つ、これに頼るしかない。



結ばれた日の思い出の写真。遠い昔のようにも思われ、また昨日のようにも思われる――その日よ。

原告団レポート

遺族――釘崎スミ子さん

機能を停止してしまった腎臓にかわって

"透析"がささえる命

せめて一日でも長く生きて

命びろい

三池大爆発犠牲者の遺族の一人に釘崎スミ子さんがいる。昭和三年七月十一日の生れだから、四十八歳。子どもたちとともに、荒尾市原万田社宅十四棟の一隅に住んでいる。

夫の命を奪われた翌昭和三十九年の春以来、一度につくり出されたおびただしい遺族の生活対策のためにと、現地に誘致された企業の一つ、荒尾アソニット工場で働いてきた。

仕事は編み立て。でも今は、もっぱら製品の管理や技術指導の任務を受け持つ組長さん。それだけに、心を砕くことも人一倍。

「かねてから積み重なってきた過労のため」とは医師の診断だというが、スミ子さんはとり返しのつかぬ難病にとりつかれてしまった。"腎不全"という病気で、その名の通り、腎臓が両方とも完全にまいってしまい、その機能がすでに永久に停止しているとのことである。

この恐ろしい事実を知ったのはことしの二月二十五日に、大牟田市立病院の内科で精密検査をやってもらってからだった。住まいの近くの某医院に診てもらってきたものの、体調はいっこうに回復せず、それどころかますます加わる異状さに、とうとうたまりかねて同病院にかけこんだのだった。

ことを知った同市立病院の医師のおどろき。このままでは、命そのものが危なかった。

もともと血液は、腎臓のなかを通り抜ける際にそこで洗われ、同時に毒性物質をすべて吸収され、その毒性物質はあの泌尿器管を通し、さらに尿とともに体外に排出されていく。そこで美しく変わった血液は、体全体を生涯通じてうるおし続けていくのである。

その腎臓が完全にまいってしまい、あろうことか、永久にその機能を停止してしまっているというのである。

どうすることもできなかった。わかったことはといえば、このままでは自分の命は明日にも絶望ということだけだった。

透析の開始

たとえ一日でもよい、スミ子さんが生きようと願うかぎり、かすかではあるが一つの道が開かれてはいた。透析がそれである。

透析は開発されてからまだ間もない医療上の技術。ひらたくいえば、永久にその機能力を停止してしまった腎臓にかわり、一連の機械の装置の力で汚れた血液を洗滌し、そして血液のなかから毒性の物質を取り除くものである、ということができようか。

ともあれその装置を備えている病院はといえば、大牟田市内には三箇所しかなく、たのむ市立病院にはなかった。

狼狽した市立病院。右の三つの病院のうちの一つ――春日医院（春日雅樹院長。大牟田市上官町一丁目）にベッドを確保、からくも命をささえているスミ子さんの体をそこへ移した。三月一日のことだった。

春日病院では、待ちかまえていただちにスミ子さんの左手首の内側を切開、動脈と静脈を直接つないで透析を開始。

すると、こんな場合とかく避けれない副作用が現われてきた。血を吐きはじめた。そのうえ、意識の方も混乱してきた。

「私が、爆発後の十三年間どんなに苦労してきたか話すから、だれか私の側へきてタイプをたたいてください」

今はまったく覚えていないというが、その頃スミ子さんはこんなことをくり返しくり返し口ばしった。

かと思えば、「きのう三川鉱で大爆発が起きたけど、お父さんは大丈夫か知らん」、とこんなことまでも……。「もうこれでおしまいでは」。見舞いにやってくるたれもが疑わずにはいられなかったものである。

命あれかし

スミ子さんの夫、釘崎義孝さんは大正十五年（昭和元年）十一月三日の生れだから、存命していれば今五十歳のはずだ。

二人が結婚したのは昭和二十七年十一月三日。義孝さんが二十六歳、スミ子さんが二十四歳のときのこと。結婚後、しばらく他所で暮らした後、荒尾市緑ケ丘の大谷社宅へ。大爆発が起きた翌三十九年に原万田社宅の現住所に越すまで、そこで暮らした。

二十九年七月二十六日長男の孝也さんが、次いで三十一年五月二十四日次男の剛人さんが誕生。今は長男の孝也さんが二十三歳で、母親のスミ子さんが働いているアソニットに勤務している。縁あって、これも同じ工場に働いていた久美子さんと結ばれ、すでに今年の一月、女の赤ちゃんをさずかった。珠美ちゃんという。

次男の剛人さんは二十一歳で、近くの町の企業で働いており、兄たちともども母親スミ子さんの身を按じながら、原万田社宅の現住所に住んでいる。

スミ子さんのことを聞くと、長男の孝也さんは一瞬顔を曇らせながらほとほと語った。

「こんどばかりがもうダメかと思い、心配しました。苦労させ続けてきた母に、もしこのまま逝かれるようなことでもあったら、それこそ亡くなった親父に申しわけがありませんから。とにかく今は一日でも長く生きていってもらいたいと、ただそのことだけを願っています」

亡夫のこと

スミ子さんの夫の義孝さんは、三川鉱の仕繰工だった。あの三池闘争―組織分裂―一斉就労―差別支配―合理化攻撃、との闘いに終始してきた三池の歩みのなかで、義孝さんは頑として三池労組の組織のなかに踏みとどまり、なかまとともに闘った。かねて心をうち割って生きてきた仲間の一人が会社の手で首切られたことが、義孝さんにはどうしても許せなかったのである。

そんな義孝さんにも、一つの趣味があった。鉄砲かついでの鳥うちで、ときにはスミ子さんも夫が飛ばすバイクの尻に乗っては、鳥うちにつき合うこともあった。

子煩悩で、「母からはよくなぐられました。あのほうきの柄の方でぶたれたもんです。でも、父からなぐられた記憶はありません」という長男の孝也さんの述懐がすべてを語り明かしていることだろう。

会社がもう少し坑内保安を大切にしていてさえくれたら、たとえその暮らしこそ楽ではなかったにもせよ、この一家は働く者の小さなしあわせに包まれながら日々をおくり迎えることができたはずだったのに……。

闘病生活

夫の義孝さんはすでに亡く、今はただ故人の位牌が仏壇の奥で、かすかな御灯明の影にゆらいでいる。戒名は"誠直院釈観明居士"。「主人と生きていた日々のすべてのことが、ほんとに夢のようです。遠い昔のことのようにも思われ、ときには昨日のことのようにも思われるのです。お供えの花は二、三日おきには取り変えてやりますが、そのたびにこっちの気持もやすまるのです」、とスミ子さん。

さいわいスミ子さんは、去る四月一日退院でき、さらに六月一日からは"訓練出勤"ということで職場復帰もできた。

だが一日おきには、前記の春日医院で透析を受けなければならない身である。

午前九時過ぎに、同医院の白いベッドのうえに横たわると、左手首の動脈と静脈に太い注射の針がブスリ、ブスリと突き刺さり、透析開始。針と針とを細長いビニールチューブがつなぎ、そのチューブのなかを、まず動脈から勢いに乗って飛び出した血液が流れ、途中コイル（透析液槽）のなかを通る際に洗われ、毒性物質を吸収され、美しい血液に変わる。そして再びビニールチューブを通りながら、静脈のなかへと帰っていく。

一回の所要時間ほぼ六時間と聞けば長いが、この透析がスミ子さんの生命の火の燃え続けるかぎり、腎臓の代役を果していくのだと思えば……。

水分の摂取量も、一日に牛乳一本半と厳格にきめられている。そのため日々三度の薬さえ、牛乳で飲むという。

「主人が生きていてくれましたら、まさかこんなめにも合わずにすんだでしょうけど……」

ついこの頃のことスミ子さんはぽつんと語ったが。